

内閣情報部三・一三

情報第一號

重慶日本語放送（七日）（關東遞信官署遞信局聴取）

日本の兵力及財力より検討して日本の總崩れの時期を推定して見る、先づ兵力であるが日本は一體どれ位の軍を出し得るかと言ふことは作戦上極めて重要な問題である、一九二六年から一九三六年に至る日本の徴兵統計に依るに現役に徴集し得る者は二百餘萬である、其の他の甲種合格者七十八萬、乙種合格者百二十八萬九千餘で合計四百十八萬餘である、一九二六年から一九三六年迄の日本に於ける死亡統計は六百六十二萬三千餘であつてこの中二十三年から三十五年迄の死亡率は八%を占めて居る、即ちこの期間内に於ける壯丁の死亡者は五十二萬餘である、又滿洲事變に於ける死亡者は日本陸軍當局の發表に依るに十七萬一千餘であるが實際は之よりずっと多い筈である、

上海事變に於ける死亡者も三萬餘に達して居る、之等の合計は七十三萬餘に達して居る、之を現役徴集を爲し得る四百十八萬から差引けば結局一昨年之の蘆溝橋事件以來日本が動員し得る壯丁は三百四十五萬餘より無いことが判るのである、然してこの三百四十五萬の内三分の一は日本國內に於ける重工業従事員、警察従事員として使用しなければならぬから實際に動員し得るのは二百三十萬に過ぎない然も日本は對露戦に備へ其の方へ四十萬は準備せねばな

144

らぬから對支侵略戦には百九十萬を動員し得るに過ぎないのである、一九三七年七月から一九三八年十二月迄の日本軍の死傷数は日本陸軍當局の發表に依れば約四十萬と言はれて居るが、周知の通り日本軍閥は日本人民を偽購する爲何時でも死傷数を少く發表するので實際はこの二倍の八十萬位あるものと見なければならぬ、其れでこれを對支戦に動員し得る百九十萬から差引けば百十萬しかないことになる、更に中國内の占領區域にて戦闘以外の仕事即ち官撫班とか其の他各種の仕事に使用する者を加へれば中國に居る者は三百萬を下らぬ者と見られるが、日本は最早之れ以上増派出來ぬ事は疑ひない所である、本年一月二十五日の議會に於て日本國內の勞働力が不足であること櫻内農相が説明して居る所から見ても日本の兵力が最早極限に達して居ることが判るのである次に日本の財力のことであるが、先日は中國と日本の財力の比較をしたが、今回は別の方面から日本の財力を検討して見ることにする、現代戦は化學戦であると言はれ、多大の金錢を必要とする現代戦は寧ろ金錢の戰爭であると言つても良い、戰爭の成否は財力に依つて判断し得るのである、日露戰爭の時は日本は一ヶ年八ヶ月の間に十五億八百萬圓の戦費を使つた、當時日本は英、米、兩國の借款九億五千萬圓を得た、日本國內では公債二億七千萬圓を發行し得たので日本が持つて居る金を出したのは僅か二億八千八百萬圓に過ぎなかつた、然し日支事變では日本は外交では孤立の状態に在る、外國からの借款等は到底不可能なのである、日本は現在外債の利子だけで十四億？も要るの

である、又海外に投資と言ふものがないのであるから日本は國內で全部戦費を調達しなければならぬ、之を言ひ換へれば對支侵略戦の戦費は全部日本國民に負擔させねばならぬ、増税とか國債に依つて負擔させねばならないのである、蘆溝橋事件以來昨年十二月末日迄日本は既に國內で八十億圓の國債を發行した、之は日露戰爭當時の約三十倍に當るものである、更に現在日本の有する國債百餘億圓に之を加へれば實に百八十億圓となるのである、然らば日本の動産？は如何なる状態であるか、昨年日本當局の公表に依れば日本國內に於ける特別銀行の預金は十四億七千三百萬圓、普通銀行の預金は百五十五億七千二百萬圓貯金局？二十五億七千萬圓、郵便貯金四十六億圓で合計二百三十七億圓である、この中から百八十億圓を差引けば五十餘億より無いのであつて、之の實際の使用價值と言ふものは事變以來通貨膨張に依つて三分の一に減じて居る、即ち日本の現金保有量が少なくなつて居ることは日本財力に致命的打撃を與へるものである、一九三六年の議會で勝田主計氏が豫算委員會の席上、現金は國防の要素であるに拘らず、却て之を使用する者があることは驚くべきことであると述べて居る、戰爭中は現金が無ければ軍需品も外國から購入出來ない、殊に日本の如き平常に於てすら諸種の物資を外國から購入せねばならないのであるから、現金が無ければ忽ち困窮する譯である、日本の現金は一月二十四日の讀賣新聞の論說に依れば一九三七年には八億圓を輸出されて居り一九三八年には公表はされていないが、大體前年より多きとも少くない

と見られる、結局昨年及一昨年の二ヶ年で日本は十六億を下なぬ現金を輸出して居ることが判る、蘆溝橋事件の際日本當局が公表した所に依ると日本銀行は十四億の現金を保有して居ることであつたが、其の後日本當局は三菱産金會社其他民間から買上げた金は二億三千圓であつて、之を加へると現金保有量は十六億圓となり、之は二ヶ年間の現金輸出額と合致する、又日本當局は金増産を計つたのである、今年一月の議會でもこの産金のことが論じられたが、其れに依ると産金擴大計畫通りの金産出は見られないと言はれて居る、結局日本の金は底拂ひの状態になつて居るのであることが判る、以上の如く日本の兵力、財力から推して總崩れの時期を考へて見る、一九三七年七月から一九三八年十二月迄の間に日本は長年貯藏して居た多くの軍用品や現金を消耗したばかりでなく兵力も八十萬も失つて居る、今後日本が百億の金を捻出しなければならぬが其の方法もないのである今や日本は現金はなく、兵力も徴集すべきものなく結局今年一杯で總崩れとなることは疑ひ得ぬ所であらう。

内閣情報部三・二四 情報第二號

重慶日本語放送 (八日)

「朝鮮義勇軍の活躍」

(關東遞信官署遞信局聽取)

日本軍閥が對支侵略を發動するや久しく日本帝國主義の非人道的壓制下に在つた朝鮮の愛國勇士は斷然起つて猛烈な反戰運動を始め同じく日本軍閥の暴行下に在る日本民衆に呼掛けた一部の朝鮮人は中國抗戰軍に参加すべく凡有困難を忍んで海を渡つて中國に來た又或る一部の朝鮮人は同様に日本の壓迫に堪えかねて滿洲へ逃げた上海では朝鮮人は中國の運動に参加し日支事變勃發するや中國の神聖なる抗戰に参加した今まで空軍に於ても朝鮮人は活躍の跡を残して居る上海に在る百四十四名の朝鮮人は朝鮮義勇隊を組織して凡有政治工作を爲しつある隊員は歸く高等教育を受けた知識層の者ばかりであつて大部分朝鮮革命黨々員である四十四名は會て中國軍事學校で軍事教育を受けた者であつて抗日軍事知識に秀でた者である朝鮮義勇隊員は會て日本内地朝鮮、滿洲、天津、上海等で日本帝國主義者に捕はれて虐待されたこともある右義勇隊は昨年十月十日双十節に正式組織されたもので朝鮮義勇隊と稱し三分團に分れて居る義勇隊結成後間もなく武漢の風雲急となつたので戰事工作の必要上幹部は全部戦線へ出掛け……將來指導の下に平漢線南段の左右地區に於て又大別山地方で色